

## アリサ・ガニエワの『婿と嫁』における暴力性

### イドジーエヴァ・ジアーナ

#### 《要旨》

本論では 2009 年にセンセーショナルな形でデビューし、注目を浴びている現代ロシアの作家、アリサ・ガニエワの 3 作目の長編小説『婿と嫁』<sup>1</sup> (2015 年) における暴力問題と排除構造を分析する。本作品の舞台は作者の出身地でもあるダゲスタン共和国というロシアの中で最も孤立し、問題となっている地域である。作者はダゲスタンにおける女性の立場を描き、言葉の暴力やモラルハラスメントを問題視しているが、それは単に女性差別を告発しているのではなく、より大きな暴力と抑圧、排除のシステムを主題としている。つまり、ガニエワはより本質的な暴力と排除の構図と、そこからいかに脱出するのかを描き出そうとしている。また、この作品では、周囲から疎外され、自身と周囲の人々が暴力の連鎖に巻き込まれる、という人物が描かれていて、ガニエワ作品の中で最も排除構造が明確に描き出されている。排除構造を論じるにあたっては、ルネ・ジラルルの神話論を参照する。

#### 《キーワード》

ロシア現代文学、ロシア文学、暴力、ダゲスタン、アリサ・ガニエワ

### 0. はじめに

本論の目的は 2015 年に出版されたアリサ・ガニエワの長編小説『婿と嫁』を暴力の観点から論じ、作中に描かれた排除構造の仕組みを考察することである。本作品ではダゲスタンという男尊女卑社会における女性の立場が描かれ、言葉の暴力やモラルハラスメントが問題視されているが、それは単に女性差別を告発しているのではなく、より大きな暴力と抑圧、排除のシステムが主題となっている。排除構造を論じるにあたっては、ルネ・ジラルルの神話論を参照し、ガニエワの作品における暴力の意味を分析する。また、『婿と嫁』を選んだ理由としては、ガニエワ作品の中で最も排除構造が明確に描き出されているからである。他の作品でも暴力性は目立っているが、本作品と比べて精神

<sup>1</sup> Ганиева А. Жених и невеста. М., 2015. 107 с. なお、本論で同書から引用する場合、たとえば 94 頁であれば(Ганиева: 94)のように記す。

イドジーエヴァ・ジアーナ：東京外国語大学大学院総合国際学研究所博士後期課程



的な暴力がはっきりと言語化されていないため、暴力構造を解説するにあたって『婿と嫁』を論じることにした。

## 1. 作家と作品について

1985年生まれのロシア語作家アリサ・ガニエワは、2009年にセンセーショナルな形で文壇に登場した。「グラ・ヒラチェフ」という男性のペンネームで発表した作品『ダルガートよ、サラーム！』がデビュー賞を受賞し、授賞式で初めて作家の正体が明かされたからである。また、アリサ・ガニエワは作家デビューをする以前に、有能な若手批評家として知られていた。あるインタビューの中でガニエワは次のように語っている。「評論家は失敗した作家だという偏見があります。私は、自分が文章だけで評価されることを目指して、世間における自分のイメージをゼロにしようとしました。そして、実験の純度を高めるために、男性のペンネームを使うことにしました。それが私だと明らかになった時、多くの人が信じませんでした。」<sup>2</sup>

アリサ・ガニエワは、ロシアとダゲスタン共和国のふたつの文化の中で育った。ロシアの中で最も孤立し、問題となっている地域、ダゲスタン共和国出身のアヴァール人<sup>3</sup>である作者は、その地域を作品の舞台としていることで多くの注目を集めている。彼女はダゲスタンのグニープ村で育ち、マハチカラの学校に通い、その後モスクワのマクシム・ゴーリキー文学大学を卒業した。作中では、ダゲスタン共和国の首都マハチカラやその付近に住む若者を主人公とし、<sup>4</sup> 現地の独特な言葉遣いや考え方をアイロニカルに描いている。現在、ダゲスタンはロシアの一部だが、ロシア人とダゲスタン人<sup>5</sup>の間で大きな文化の違いが見られ、互いを余所者扱いし、頻繁に問題が起きている。ロシア人はダゲスタン人を乱暴で暴力的な民族として認識している一方で、ダゲスタン人はロシア人を伝統を守らない民族として捉えている。その偏見が引き起こす差別がダゲスタンとロシアの間に存在し、現在さまざまな問題を引き起こしている。

---

<sup>2</sup> Федорова Н. Писатель Алиса Ганиева о своем новом романе, дагестанских традициях и гипотетических последствиях отделения Кавказа. Часть 2, 15.07.2018.

[<https://realnoevremya.ru/articles/105932-intervyu-s-pisatelem-alisoy-ganievoy>] (2021年10月9日閲覧) イドジーエヴァ訳。以後、ロシア語からの引用に際しては、日本語訳はすべてイドジーエヴァによるものである。

<sup>3</sup> アヴァール人 (аварцы) はカフカース山脈に住む民族であり、北東カフカース語族の言語アヴァール語を話し、ロシア人とは民族の部類や文化が異なる。宗教はスンニ派イスラム教であり、熱心な信者が多い。ダゲスタン共和国は多民族の住む地域だが、その中でアヴァール人が最も多いとされる。

<sup>4</sup> 最近、作家本人がダゲスタンのテーマから離れ、最近作ではダゲスタンが舞台ではないことが多い。

<sup>5</sup> ダゲスタンに住む 38～102 の民族を指す言葉。

作者の3作目の長編小説『婿と嫁』はロシアブッカー賞の2位となった。1作目の『ダルガートよ、サラーム！』に続き、2作目の『祭りの山』（2012年に発表、ヤースナヤ・ポリャーナ賞にノミネート）と3作目の『婿と嫁』はダゲスタンを舞台としている。また、最初の2作とは違って3作目は女性視点から語られ、ダゲスタンの社会における女性の立ち位置に注目している。作者曰く「『婿と嫁』は、結婚制度についての小説であり、保守的な社会のモデルがコーカサスではどのようにモダニズムの認識と共存しているのか、また、コーカサスは実際には切り離されたよく分からないものではなく、同じ問題を抱えた同じロシアであり、言語・民族・精神性の多様性によって凝縮され、誇張され、煮えたぎっているということを描いています。」<sup>6</sup>

『婿と嫁』の主人公はパーチャ（パチマットの略、ダゲスタンで最も一般的な女性の名前）という25歳の女性である。彼女は家族や親戚に結婚を勧められているが、結婚よりもキャリアに関心を持っている。ただ、ダゲスタンの女性には母になる以外の選択肢がなく、キャリアを選ぶ女性が非常に生きづらい男尊女卑の社会である。パーチャの兄は「ロシア人」と結婚し、モスクワで働いているが、彼らの親は未だに嫁を認めていない。パーチャは兄のようにモスクワに移りたいが、親がそれを許さず、特に母がダゲスタン人との結婚を押し付けようとしている。一方でもう1人の主人公、マラートはモスクワで働く弁護士だが、パーチャと同様に結婚を勧められている。彼の親は勝手に大金をかけて結婚式場を予約し、嫁のいない息子の結婚式の日を決める。嫁探しをするために故郷に帰ったマラートがパーチャと出会い、恋に落ち、結婚する間際まで行くが、結局2人は結ばれない。

## 2. 暴力性について

さて、本作品における暴力性に移りたい。すでに述べた通り、同作品ではダゲスタン社会における様々な偏見が暴かれていて、ダゲスタンで育ち、その環境をよく知っている作者の経験をもとに書かれている。ダゲスタン共和国は悪く言えば閉鎖的で保守的な空間であり、余所者の存在に非常に敏感な社会である。さらに、その特徴としては、ダゲスタン人とそうでない人に対する態度が著しく変わることが挙げられ、ダゲスタン人の「あるべき姿」が人に強要されるということが本作品のテーマのひとつである。作中でアリサ・ガニエワが示している通り、それは女性に対するプレッシャーとしてだけではなく、男性に対しても同様に多発している現象である。このような問題は暴力と深く

---

<sup>6</sup> Федорова Н. Писатель Алиса Ганиева о своем новом романе, дагестанских традициях и гипотетических последствиях отделения Кавказа. Часть 2, 15.07.2018. [https://realnoevremya.ru/articles/105932-intervyu-s-pisatelem-alisoy-ganievoy] (2021年10月9日閲覧) 筆者訳。

結びついており、本作品では主にモラルハラスメント<sup>7</sup>の形で表されている。いくつか例を挙げてみよう。

『婿と嫁』で描かれるモラルハラスメントは主に母親が子供に対してふるうものである。ただ、それと同時にダゲスタンの狭い社会が与えるプレッシャーの描写も重要な役割を果たしていると言える。まず、母によるモラルハラスメントの描写を参照しよう。パーチャがダゲスタンの伝統に逆らい、親の見えないところでマラートと会っていて、プロポーズされたが、そのことを母に話したところ叱責されるというシーンが以下の通りである。

– Мерзавка, трясогузка, негодница!

Мама задыхалась, перечисляя мои преступления: прожжённые утюгом скатерти, переваренные супы, поздние отлучки, вызывающе светлые брюки, остриженные, как у свнуха, волосы. [...]

– И тебя он ославил. И не факт, что женится. А если женится, будешь считать его любовниц, пересчитывать. Только отвернёшься, а он к Анжеле в калитку.

Я уклонялась, увивалась от падающих в мою поющую душу камней.

「ろくでなし、セキレイ、悪がきめ！」

母はあえぎながら、私の罪を数え上げた。アイロンで溶かしたテーブルクロスの数々、調理しすぎたスープ、遅い時間に家を空けること、大胆に明るい色のズボンを履くこと、宦官のように短く切られた髪。 [...]

「そして彼はあんたを有名にしたわ。それに結婚してくれるとは限らない。もし結婚したとしても、彼の愛人は数えても数えきれないわよ。目を逸らした隙に、彼はアンジェーラのところに潜り込みに行くでしょうね」

私は自分の歌う魂に飛んでくる石を避けて、はぐらかした。（Ганиева: 94）

母が娘の「罪を数え上げ」る際、特に重要だと思われるのは、ズボンと短髪に関する指摘である。ダゲスタンの女性の理想像は、腰まで髪を伸ばし、常にドレスを着て料理

---

<sup>7</sup> ここでは厚生労働省の「こころの耳」からの定義を使用する。「言葉や態度、身振りや文書などによって、働く人間の人格や尊厳を傷つけたり、肉体的、精神的に傷を負わせて、その人間が職場を辞めざるを得ない状況に追い込んだり、職場の雰囲気悪くさせることをいいます。パワハラと同様に、うつ病などのメンタルヘルス不調の原因となることもあります。」[<https://kokoro.mhlw.go.jp/glossarycat/mentalhealth/>]（2021年9月29日閲覧）。モラルハラスメントは職場のみならず、家庭内でも発生することがあり、主に言葉や態度などのような目に見えない暴力で相手を傷つけ、追い詰める行為を指す。

と家事をてきぱきとこなしている女性だが、パーチャは明らかにそのイメージから外れている。そのようなパーチャは母にとって自慢できる娘ではないのである。

娘の幸せを喜ぶどころか、言葉によって攻撃する母の態度は、母が結婚相手を自分で選びたいと考えていたことを示唆している。ダゲスタンでは媒酌の文化が強く根付いており、結婚する前の女性は男性と2人きりになることが許されない。もし、結婚前に誰かと付き合っていたことが露わになったら、その女性は汚らしい女、つまり娼婦として扱われ、結婚できなくなってしまう。ダゲスタン人にとって結婚することこそが女性の生きる目的と考えられているため、娘が親の許可なしに男と逢引していたという事実はその一家の名前に泥を塗る行為に等しい。パーチャの両親は最終的に結婚を許すが、結婚式の日マラートは逮捕されて会場に現れない。<sup>8</sup> 心配でいてもたってもいられないパーチャに母は次のように言う。

Мама, зашедшая в мою комнату, злорадно зашипела мне в ухо:

– А вышла бы, как нормальная девушка, за Тимура, ничего бы такого не было. Ты смотри, этот Марат нас в грязь втопчет.

私の部屋に入った母は、意地悪そうに耳元でシューッという音を立てながら話し出した。

「普通の女の子のようにティムールと結婚したらこんなことにならなかったのにね。ほら見ろ、マラートのやつ、私たちを泥に踏みにじるわよ」（Ганиева: 101）

この場面から読み取れる通り、蛇に例えられているパーチャの母は娘の幸せよりも自分がいかに周りの人の目に映っているのかを重視する。彼女は意識的に娘を攻撃しているわけではなく、モラルハラスメントの加害者の多くの人がそうであるように、無意識的に精神的な暴力を振るっていると言える。<sup>9</sup>

---

<sup>8</sup> アンジェーラは彼が幸せになることを阻止したかったため、彼がワッハーブ派であるという嘘について警察に通報している。アンジェーラは以前、マラートが好意を抱いていた女性であり、周囲からは軽い女性として見なされている。作品の現時点ではヒジャブに身を包み、年配の男性の何番目かの妻になっているが、結婚する前は服装とメイクが派手で、複数の男性と関係を持っていた。結婚したのち、彼女とマラートが2人きりになった時に彼女が彼を誘惑するが、マラートはその誘いに乗らずに帰ってしまう。プライドが傷つけられたアンジェーラは密告の形で復讐している。ここでマラートも暴力の連鎖に巻き込まれてしまう。

<sup>9</sup> 母親から娘へのモラルハラスメントの意味合いについて考えた際に様々な解釈ができるが、たとえば角田光代の『坂の途中の家』と同様に母の愛情の裏返しかもしれない。「母親は必死になって娘を認めまいとした。いつまでも無知で、ぐずで、常識知らずで、手のかかる子どもだと、自分に

母親の冷酷な発言は愛情の裏返しでもあり、また彼女は娘にダゲスタンの女性として相応しい態度を強いているだけで、2人の関係は完全に破綻しているわけではない。それは恐らく家族を重んじるダゲスタン社会の特徴が表れているところだが、それと同時に、基本的に子供は親の意思に反くことができない状況が示唆されている。

次に男尊女卑によるモラルハラスメントの事例の分析に移りたいが、パーチャに求婚しようとしているティムールという男性の描写が以下の通りである。

Тимур вёл меня самодовольно, как купленную на базаре козу, не примеряясь к моему отстающему шагу, подавая прохожим мужчинам руки и важно кивая поселковым матронам в цветастых косынках и колыхающихся на ветру бесформенных балахонах.

ティムールは、私を市場で買ったヤギのように得意そうに連れ歩き、彼に遅れがちな私の歩幅に合わせようとせず、通りすがりの男性と握手したり、風に揺らされる色とりどりのスカーフを被った形なき服を着た村の婦人に会釈したりしていた。

(Ганиева: 45)

パーチャは彼と SNS で知り合い、故郷に帰ってから初めて実際に会う。狭いコミュニティの中、人々は噂以外することがなく、誰が誰といつ、どこで会っていたかがすぐに噂になり、町中に広がる。ここで興味深いのは、パーチャが自分のことを市場で買われたヤギに例えているところである。ティムールには一個人としての彼女に対する興味がなく、将来の妻、つまり自分の所有物にする以外の欲望はない。

次の場面はパーチャがティムールに誘われて若者の会議に参加した後に行われるコンサートに行き、帰ろうとした際に止められる場面である。

– Подожди, Пятя, – гаркнул он мне сзади в ухо. – Мне сейчас слово дадут. А потом мы ещё посидим где-нибудь. Ты соображаешь, но тебя направить нужно. И волосы отращивай, а то слишком короткие носишь.

---

も娘自身にも思いこませようとした。」「憎しみではない、愛だ。相手をおとしめ、傷つけ、そうすることで、自分の腕から出ていかないようにする。愛しているから。それがあの母親の、娘の愛しかただった。」(角田光代『坂の途中の家』朝日文庫、2018年、478頁/480頁。)ただ、角田光代の作品と違って、ガニエワが描いているモラルハラスメントは娘にトラウマを負わせるほど深刻なものではない。

「パーチャ、待て」彼は後ろから私の耳元に叫んだ。「今から俺の出番だ。その後、どっか行こうか。君は頭は悪くないけど、指導が必要だ。後、髪を伸ばしな、短すぎるから」 (Ганиева: 50)

その日初めて出会った女性に対し、ティムールは高圧的な態度を示し、パーチャより上位に立とうとする。<sup>10</sup>

次にダゲスタンの若者を代表しているティムールの言葉遣いに注目したい。以下の場面はパーチャがティムールを待たずにマラートと2人でコンサートから帰ったのちにティムールから電話を受けるシーンである。

– Ты что, нюх потеряла, самое? – закричал он в трубку. – Ты куда ушла? Шах сказал, тебя какой-то тип пошёл провожать!

– Я...

– Чё якаешь? Мы о чём договаривались?

– Ни о чём. Я спешила.

– Спешила она! Если спешила, я бы тебя довёл!

– Не надо. Тимур, спасибо за всё, мне понравилось заседание. Не пойму, чего ты ещё хочешь?

– Подожди, ты что со мной так разговариваешь официально?

– Как?

– Нормально разговаривай!

– Я нормально разговариваю.

– Ты на понты вскочила, самое! Чего о себе думаешь? Хамить не надо мне!

– Я с тобой вежлива...

– Не перебивай меня! Когда, самое, увидимся? Кто с тобой был? Куда вы пошли? Я искал!

– Я сегодня уезжаю к тёте в город, не смогу с тобой больше увидеться.

– Не ври мне. Чё стало, самое? Ты задний ход даёшь?

---

<sup>10</sup> アリサ・ガニエワがダゲスタン人に批判されている理由はこのアイロニカルな描き方にあると思われるが、実際に現地の男性は作者が描いている通りの人が多いため、同作品はダゲスタンの文化や民族性を理解するのに貴重な資料である。日本ではほとんど見られなくなった同様な差別が21世紀の今でもロシアの一部で見られていることは興味深い。

「お前は何様のつもりなんだよ、つまりは？」彼は電話に向かって叫んだ。「どこに行った？ シャーフは、誰かがお前を見送りに行ったと言ったぞ！」

「私は…」

「ワタシ、ワタシってしつこいよ！ 俺とどんな約束だった？」

「何の約束もしてない。急いでたんだよ。」

「急いでただと！ 急いでたなら俺が家まで送ってやったよ！」

「その必要はない。ティムール、いろいろありがとう、会議は面白かった。他に私から何が欲しいのかが分からない」

「待て、どうしてそんなかしこまった話し方してんだ？」

「どういうこと？」

「普通に話せよ！」

「普通に話してるよ」

「何調子に乗ってんだよ、つまりは！ 何様のつもりだ？ 俺に乱暴な口をきくな！」

「礼儀正しく話してるじゃない…」

「話を遮るな！ つまりは、いつ会えるんだ？ お前といたのは誰だ？ 二人でどこに行った？ 俺は探したんだからな！」

「今日、町に住むおばさんのところに行くからもうあなたとは会えない」

「嘘つくな。どうした、つまりは？ 俺から逃げる気か？」（Ганиева: 52）

ダゲスタンの歪んだロシア語を訳すことは非常に難しいが、不良やチンピラの言葉遣いをイメージしていただきたい。ティムールは一見ロシア語を話しているように見えるが、モスクワやサンクトペテルブルクで使われているロシア語とは単語の意味合いが異なっている。アリサ・ガニエワ以前にこのようなダゲスタンの若者言葉を文学作品に取り入れた例はなかった。彼女のデビュー作『ダルガートよ、サラーム！』がベストセラーとなったのは、テーマ性だけではなく、独特な言葉遣い<sup>11</sup>が大きなインパクトを与えたためでもある。ここでティムールはパーチャに対して次々に差別発言を連発しているが、それは彼にとっては当たり前の話し方である。マチズモ（男性優位主義）が文化の一部となっているダゲスタンにおいて、男性は常に女性を見下し、高圧的な態度で接している。

---

<sup>11</sup>たとえば、ティムールの口癖である「самое」（ここでは、「つまりは」と筆者が訳している。本来は「最も」という意味である。）という単語がその例として挙げられるが、ダゲスタンの男性がよく使う言葉である一方で、他のロシアでは「最も」という使い方しかされない。



Иди. А я к твоему отцу всё равно зайду. [...] А ты бы лучше юбку надела.

行きなさい。どっちみちお前の父に会いに行くからな。[...] それと、スカートを履いた方がいいぞ。(Ганиева: 66)

女性であるパーチャと話すより、彼女の父と直接会おうとするティムールの発言は、女と話しても仕方ないという考え方を示している。彼はここで再びパーチャの身なりを批判しているが、これもまたダゲスタンの文化が生み出した差別である。ダゲスタンでは歴史的に女性がスカートやドレス以外の服を身に着けることなく、そうした傾向は今もなお続いている。パーチャ自身は進歩主義者だが、ズボンを履くことや髪を短く切ることを批判するティムールとパーチャの母は典型的な保守主義者である。ティムールは女性は「頭が弱い」<sup>12</sup>と持っているところも守旧的な考え方であり、現代ダゲスタン人のカリカチュアとして描かれている。さらに、女性に対する差別を最もよく表している場面は以下の通りである。

– Но вы, к сожалению, на целых два года его старше. Засиделись в девушках. Когда я на следующий день рассказала об этом брату, тот и сам на меня напустился:  
– Конечно, он прав! Скоро на тебя никто не посмотрит!

「しかし残念ながら、あなたは息子より 2 歳年上です。行き遅れてしまいましたね」

翌日、私がそれについて兄に話すと、兄も私を叱責した。

「もちろん、彼の言う通りだ！ 少ししたら誰もおまえを見ることすらなくなるよ！」(Ганиева: 8)

パーチャは兄に勧められ、お見合いに参加するが、そこで相手の父と 2 人きりで会うことになり、年齢を聞かれた後の父の反応がここでは描かれている。結婚して子供を産むことが女性の生きがいとされるダゲスタンでは、10 代のうちに結婚することが多い。ダゲスタン人にとって 25 歳の女性はすでに「行き遅れてしま」っているのである。

---

<sup>12</sup> Особенно – девушки, потому что у них ум слабее. – Ганиева: 46。

### 3. 生贄としてのルーシク

さて、次に注目したいのは男性社会における差別問題である。男性に対するモラルハラスメントの事例が以下の通りである。

А дома одно и то же: когда женишься, когда женишься? Причём, конечно, на своей хотят женить, чтобы нашей нации. А недавно в посёлке узнали, что я на танго хожу. О-о-о, прямо пальцем показывали...

「家でも同じだ。いつ結婚する？ いつ結婚する？って。それにももちろん、彼らはこの女と結婚させたいんだ、同胞とね。それで最近、僕がタンゴに通っていることが村の人に知られたんだ。ああ、まったく、文字通り僕は後ろ指をさされたよ...」 (Ганиева: 17)

これはマラートの友人ルーシクのセリフである。彼はまさしく「出る杭は打たれる」というべき存在であり（皮肉なことにルーシクのあだ名は「釘」である）、村人たちと異なる行為を行うことで狂人扱いされ、いじめられ、最終的には殺されてしまう。以下に引用するのは、マラートが彼について自分の母親と会話する場面である。

– Какой Русик? Танцор балета, что ли? – встряла мать, поправляя шпильки в расплзающемся пучке.

– Какого балета, мама? Что ты издеваешься?

– Никто не издевается! – резко одёрнула мать. – Так люди про него говорят. Ходит по посёлку, как жар-птица ошипанная, петух без перьев, а думает, что он лучше всех. Самомнение – страшный грех, Марат.

「どっちのルーシク？ バレエダンサーの？」ほつれたシニヨンにヘアピンを挿し直しながら、母が口を挟んできた。

「バレエって何だよ、母さん？ 俺をからかっているのか？」

「誰もからかってなんかないわよ！」母はきつい口調でたしなめた。「みんなそう言ってるの。羽が摘み取られた火の鳥、羽のない雄鶏のように村を歩き回って、自分がみんなより優れていると思いついでいる。マラート、自惚れってのは恐ろしい罪なのよ」 (Ганиева: 20)

ここからも分かるように、ルーシクはタンゴに通っていることで人びとから馬鹿にされている。彼はパーチャと同様に共同体とうまく馴染めず、浮いている存在である。ただ、表面上は村のルールに従っているパーチャとは違って、ルーシクは自分が感じる違和感をはっきりと周囲に表明する。

ルーシクが殺害されたのは、村人を挑発したことがきっかけであった。彼は「俺は不可知論者だ」というポスターを持ち、モスク前の大通りに出て、自分の信念を貫こうとするが、理解されず、複数の男性に絡まれて殺されてしまう。

以下に引用するのは、パーチャとマラートがこの事件について話し合っている場面である。

– Он не писал этого, люди всё врут и путают! Я видел плакат. Там было: «Я – агностик».

– Правда? Но это совсем другое!

– Конечно! [...] Среда заела. Вот! Его же среда реально ела! Разжевала и проглотила. [...]

– Мои родители, например, считали его клоуном.

– А мои что, не считали, что ли? – пожал плечами Марат. – Пятя, да если честно, его собственные родители думали так же. И дома его третировали. Он рассказывал.

「彼はそんなことを書いてない、みんな嘘をついて間違ってる！ ポスターを見たよ。「俺は不可知論者だ」と書いてあった。」

「本当に？ でも、それは全く違うことじゃない！」

「もちろん！ [...] 環境が食い殺した。そうだ！ 環境が文字通り彼を食ったよ！ 噛みちぎって飲み込んだ。 [...]

「私の両親はね、彼のことをピエロだと思ってた」

「俺の親だってそうさ」マラートは肩をすくめた。「パーチャ、正直なところ、彼自身の両親も同じことを考えていたよ。そして家でも彼はいじめられていた。彼がそう言っていた」 (Ганиева: 78)

ここで興味深いのは、彼を殺害した者たちや村の人々がポスターの意味を理解していないことである。彼らにとって不可知論者とはアッラーの存在を否定している敵である。つまり、彼が殺されたのは、信者の前で彼らの神の存在を疑ったからであるとも言える。アリサ・ガニエワがここで描いているのは、最近 10-15 年のダゲスタンにおける宗教の流行である。近年、若い信者たちはイスラム教をよく理解せず、他の宗教を信じて

いる人に対して暴力を振るうケースが多発している。彼らはルーシクの「俺は不可知論者だ」との言葉を「アッラーは存在しない」という意味だと曲解し、それに対してルーシクを制裁したのである。

ルーシクの殺害について考えるに際しては、ルネ・ジラルルの『暴力と聖なるもの』<sup>13</sup>で論じられているソポクレスの『オイディプス王』における生贄と暴力の関連性を参照したい。ルネ・ジラルルによると、暴力には源がなく、いつ、なぜ発生するか分からない。さらに、一度発生した暴力は新たな暴力を呼び起こし、無限の連鎖ができてしまう。その連鎖を止め、社会の平和を保つために生贄の儀式が作られるのである。たとえば、『オイディプス王』では災いの元がオイディプス自身だったことが発覚し、その結果として彼は生贄となって、国から追い出される。オイディプスを追放することで国の平和が取り戻され、暴力の連鎖が途絶える。『婿と嫁』においては、オイディプスと同様にルーシクが災い（＝暴力）の源とみなされ、町の平和を取り戻すために生贄として排除される。ルーシクの意味が無視され、複数の男性によって殺害（排除）されている点は、明らかに生贄の儀式を想起させる。宗教心が強い地域であるダゲスタンでは 21 世紀の今もなお生贄の文化が残っており、毎年ラマダーンに神への捧げ物として、羊を屠り、貧しい人や家族と分け合うことが習慣となっている。ルネ・ジラルルが述べている通り、生贄として選ばれるものは人間に近い無垢な動物（牛や羊）が多いが、人間が選ばれることもある。その場合、新たな暴力を呼び起こす可能性がある者は選ばれず、殺しても復讐される恐れがない男性が生贄になることが多々ある。本作品においてルーシクは暴力を振るう意思がない、無垢な存在として描かれている。

この点において、ルーシクと同じく共同体の異端者であるパーチャが生贄とならなかったことは示唆的である。ルーシクと違ってパーチャは村社会の中で完全に浮いている存在ではない。母と上手くいってなくてもパーチャは親に反くことはしていない。結婚に関してもパーチャは親の許しを得ている。家族の中でも居場所を見出さなかったルーシクは殺される前から社会の一員ではなくなり、至る所で排除されていたが、パーチャは違和感を抱きつつ共同体の枠組みから完全に逸脱してはいない。もしルーシクのようにパーチャが殺されたら、彼女の親は必ず殺害者に復讐するであろう。さらに、ずっと村から出ることなく、ダゲスタンという閉鎖的空間から出たことのないルーシクと違って、パーチャはダゲスタンの外の世界を知っている。ルーシクはダゲスタン人の「あるべき姿」によるプレッシャーから逃れる術を知らないが、一度ダゲスタンを出たことのあるパーチャはそうした抑圧のない世界への手がかりをすでに得ているのである。パーチャと同様に、マラートもまた生贄にはされない。彼もまた外の世界を知っている人間

---

<sup>13</sup> ルネ・ジラルル（古田幸男訳）『暴力と聖なるもの』法政大学出版局、2012年、610頁。

であり、なおかつ（ロシア人と結婚した彼の兄とは違って）ダゲスタンの社会の枠組みからまだ完全に外れているわけではないからである。

さらに興味深いのは、ルーシクが殺される前に実はもう 1 人の男性が殺されていることである。マラートの兄弟であるアーディク（マラートの父親の血を引いた子供）が車に轢かれて殺される場面が回想で描かれている。轢いた犯人はハリルベークという権力者だが、彼は罪に問われることなく、その後いつも通りの生活を送っている。実はこのハリルベークは、アリサ・ガニエワの作品において最も重要な役割を果たしている人物でもある。

#### 4. ハリルベーク —暴力性を逃れて—

パーチャとマラートが生贄とならなかった理由として、もうひとつの可能性について考えてみたい。アリサ・ガニエワのいくつかの作品に共通して現れる不思議な人物がいる。それは、デビュー作をはじめとし、実際には登場しないが重要な役割を果たしているハリルベークという男性キャラクターである。<sup>14</sup>『ダルガートよ、サラーム！』では主人公がハリルベークを探す話が主軸であり、『婿と嫁』ではハリルベークが刑務所に入っていて、その前後に起きた様々な事件が裏のテーマ（見方によっては主題であるとも言える）となっている。『祭りの山』ではハリルベークは実在している権力者として会話の中でしか登場せず、主人公が「祭りの山」にいる時にだけ実際に言葉を発し、幻の山の案内人として描かれている。シャフランスカヤによると、ハリルベークはイスラム教の預言者ヒズル（またはハディル、Khidr、al-Khadir）である。ヒズルは尊敬される対象であり、聖典やハディースに登場しているスーフィーのキャラクターの中で人気の高い聖人である。<sup>15</sup>

「ヒズル」という名は「緑色」を意味し、イスラムの信仰の中でヒズルは緑色と深く結びついている。作中では、ハリルベークが登場するすべてのシーンで緑色の何か（コート、瓶、ワイングラス）とともに描かれている。つまり、緑色が彼のシンボルカラーと言える。（イスラム教のシンボルカラー自体も緑色である）。ハリルベークが聖人ヒズルを具現化した存在であるならば、アーディクを殺したことで罰せられなかった理由も理解できる。実際、クルアーンで描かれているヒズルは若者を殺して、<sup>16</sup>それが彼

---

<sup>14</sup> このハリルベークの存在ゆえに、ガニエワの作品はしばしばマジックリアリズム的であると指摘される。

<sup>15</sup> Шафранская Э. Ф. Бутылка с надписью "икс", или поиски неизвестного в романе Алисы Ганиевой "Жених и невеста" // Полилингвильность и транскультурные практики, 2020. No1. С.68. [<https://cyberleninka.ru/article/n/butyl-s-nadpisyu-iks-ili-poiski-neizvestnogo-v-romane-alisy-ganievoy-zhenih-i-nevesta>] (2020年12月28日閲覧)。

<sup>16</sup> Там же, С. 69.

の予言と教えの一部である。現にヒズルは将来的に親の名前に泥を塗る若者を殺している。

作中でハリルベークと実際に会っているのはパーチャとマラートだけで、彼ら 2 人は聖人の弟子として選ばれているのだとシャフランスカヤは指摘する。さらに踏み込んで解釈するなら、パーチャとマラートは二重写しにされていると読み解くことができるだろう。上で引用している箇所からも分かる通り、彼らは考え方が似ていて、非常に気が合う設定になっている。さらに、家族によるプレッシャーや置かれている状況（結婚を押し付けられている中、ダゲスタンから脱出したい願望を持っている点）も共通する。彼ら 2 人ともヒズルであるハリルベークに選ばれ、修行しているからこそ村から排除されることなく、生贄にされないのではないか。

パーチャとマラートをハリルベーク＝ヒズルの弟子として位置づけるならば、本作品のラストには新しい解釈ができるようになる。パーチャが初めてハリルベークと会った時は 8 歳だった。シャフランスカヤが指摘している通り、パーチャは恐らくその頃からハリルベークの弟子として選ばれ（ハリルベークが差し出したワインを飲んだ場面がそれを証明している）、それから作品の結末に至るまで彼女は自分の道を探し続けている。最後にパーチャは自分の結婚式から逃走し、列車に乗って海を目指している。ここでは海が彼女の進むべき道の象徴として描かれている。彼女は海を目指すことで、周りに押し付けられた未来ではなく、自分自身が選んだ道を進むことになる。ここでパーチャと祖母の会話を引用しよう。

– Ты же видела море? [...] Кто обычно сидит на суше? Знатоки законов. [...] Но есть те, которые ищут истину. Они заходят в море и ныряют за жемчугом на самое дно. Они — путешественники. И еще существуют третьи. Которые плавают в лодках, потому что так безопаснее. [...]

– И кто такие эти третьи?

– Дошедшие до конца пути... Вот ты, я вижу, хочешь отправиться в путь, нырнуть за жемчугом, а мать твоя осталась на берегу. Тебе выбирать: остаться или двигаться.

「海を見たことがあるでしょう？ [...] 普通、どんな人が浜辺に残る？ 守るべき掟をよく知っている人たちよね。[...] でも、真実を求める人もいる。彼らは海に入り、底まで潜って真珠を探している。彼らは旅人。それから、また別のタイプの人がある。それはボートで泳ぐ人たち。そうした方が安全だから [...]

「その別のタイプってどういう人たちなの？」

「最後まで辿り着いた人たちよ... あなたは旅立って真珠を探しに行きたいと思っているようだけど、あなたのお母さんは浜辺に残っている。選ぶのはあなたよ、残るか旅立つか」 (Ганиева: 91)

祖母は真実を知っている聖なる存在として描かれ、パーチャに選択肢を与えている。本作品では海のイメージが非常に強く、<sup>17</sup>ダゲスタンのシンボルであるカスピ海が巨大で制御できない力として描かれている。

さらに、ラストシーンでハリルベークがマラートにワインを注いでいるが、これもまたマラートが弟子として選ばれ、<sup>18</sup> 自分の生きるべき道を見つけたことの象徴である。彼はワインを飲みながら、海に入っていく女性の姿を目撃している。その女性は恐らくパーチャである。岸辺から海を眺めるマラートと海に飛び込んだパーチャは対照的であり、後者と比べて前者はまだ自分の進むべき道に積極的に踏み入っていないと言える。彼はまだ岸辺から海を見ることしかできず、中に飛び込む勇気を得ていない。これが 2 人の根本的な違いであり、彼らが結ばれなかった原因のひとつなのではないだろうか。

## 5. まとめ

アリサ・ガニエワの作品は民族的な色彩の中でその社会の病を描くことで世界中のイスラム地域における差別問題や宗教問題を暴いている。一見、恋愛や結婚問題が主題となっているように見える『婿と嫁』の裏のテーマとして宗教の違いが呼び起こす暴力が目立っている。現にルーシクが殺害された場所はモスクの前である。加えて、作者は今まで発言権のなかったダゲスタンの女性を代表して自由を訴えている。<sup>19</sup> 彼女が作る物語はどの手法にも当てはまらず、新世代の文学の産物だと言える。ポストモダンの影響から解放されていると同時に純粋な現実主義にも属していない。ポストコロニアル主義とマジックリアリズムの様子が特徴的である。また、世界文学で言えば、サルマン・ラシュディの影響を受けているように見える。アリサ・ガニエワの作品には彼と同様に自分の民族の歴史を再認識しようとしている試みが見られる。さらに、現代ロシア文学でいうと、アリサ・ガニエワと比較対象になりやすいのはグゼリ・ヤーヒナである。同上の 3 人の作家はふたつの文化の中で育ってきていることが特徴的で、故郷の文化や宗教問題に注目している。加えて、アリサ・ガニエワとグゼリ・ヤーヒナの双方の作品でふたつの文化の「境界性」が目立っている。アリサ・ガニエワはロシアとダゲスタンの文

---

<sup>17</sup> ヒズルは「海運の神」ともされている。また、カスピ海がダゲスタンのシンボルの一つなので、この作品で海のイメージが強調されていることは当たり前とも言える。

<sup>18</sup> ハリルベークはマラートのことを「弟子」(ученик)と呼んでいる。- Ганиева: 106。

<sup>19</sup> アリサ・ガニエワは宗教問題が呼び起こす暴力についてより詳しく『祭りの山』で触れている。

化の間に立ち、<sup>20</sup> グゼリ・ヤーヒナはロシアとタタールの文化の架け橋となっている。2人とも現代文学界において非常に興味深い立ち位置にいて、現代文化の多様性に気づかせている作家である。

ガニエワの特徴として目立っているのは、女性主人公を使うことが少なく、男性視点で語ることも多いという点である。本作品中では男性に対するモラルハラスメントも問題視されている。殺害されたルーシクが村の人や家族からモラルハラスメントを受け、日々笑い者にされていることがその事例として挙げられる。彼はダゲスタンの伝統的な踊りではなく、タンゴを踊ることで馬鹿にされ、男性好きであることすら疑われる（ダゲスタンでは男性に対する最大の侮辱とされ、同性愛者の存在が一切認められていない）。このように同作家の作品で現代社会に根付いている精神的な暴力の正体が暴かれ、証明されている。社会のルールに従わないルーシクが村の人に殺され、生贄として排除されていることが現代社会の病を暴き出していると言える。生贄の仕組みを理解するのに必要不可欠な人物であるハリルベークがガニエワ作品を転々とし、イスラム教が呼び起こす暴力問題を暴いていると言える。

さらに、『婿と嫁』以前のガニエワ作品は特に男性に注目していて、男性から見た男尊女卑社会を描いている。一方で『婿と嫁』ではガニエワにとって珍しい女性主人公が使われており、はじめて女性目線のダゲスタンが描かれている。ガニエワはダゲスタンにおける女性への精神的、物理的暴力と向き合っている。男尊女卑がまだ目立つ地域、つまりダゲスタンやイスラム教の世界において伝統的な価値観と現代的な男女平等の価値観はぶつかりながら共存している。宗教にもとづく伝統的な社会規範が後者にとって精神的な暴力（物理的な暴力もそうだが）と化し、深刻な社会問題を引き起こしている場合もある。そういった点で、今まで注目されなかったダゲスタンの女性差別に焦点が当てられているアリサ・ガニエワの作品は特に貴重である。彼女の作品から分かる通り、ロシアではモラルハラスメントに対する意識が薄く、女性に対する精神的な暴力（時には物理的な暴力も）が日常的に振られることに疑問を抱かない人が多い。アリサ・ガニエワの作品においてお見合い結婚や娘に結婚を押し付ける親が登場している。閉鎖的な空間であるダゲスタンでは女性は発言権を持っていないことが多く、作者はそれに抗い、女性差別に気づかせようとしている。ただしガニエワの作品は単なる「女性差別の告発」とどまるものではない。つまり、ガニエワはより本質的な暴力と排除の構図と、そこからいかに脱出するのかを描き出そうとしている。『婿と嫁』は社会にお

---

<sup>20</sup> Алиса Ганиева – человек на границе культур. (アリサ・ガニエワはふたつの文化の間にいる人である。) – *Беляков С.* Дагестан времен исламской реформации (Алиса Ганиева. Праздничная гора). // Октябрь. 2013. № 8. С. 178.



ける暴力と排除の仕組みそれ自体に向き合った作品であり、その仕組みから一歩踏み出した女性を描いた物語である。<sup>21</sup>

---

<sup>21</sup> ちなみに、ガニエワの最新作はマヤコフスキーの恋人だったリーリャ・ブリークのバイオグラフィである。ガニエワは『婿と嫁』を境に、ダゲスタンのテーマから一旦離れ、ロシア（モスクワを思わせる都会）を舞台とする作品を書いている。リーリャ・ブリークという強い自己を持った女性を題材に取り上げたのも、社会規範の枷から抜け出そうとするパーチャの延長線上にあるのではないかと考えられる。

## **Violence in *Bride and Groom* by Alisa Ganieva**

**Diana IDZIEVA**

This paper examines the problem of violence and the structure of exclusion in *Bride and Groom* (2015), the third novel by Alisa Ganieva, a contemporary Russian writer who has been in the spotlight since her sensational 2009 debut. The novel is set in the Republic of Dagestan, the author's homeland and one of the most isolated and problematic regions in Russia. Although the book portrays the position of women in Dagestan and addresses the issues of verbal abuse and moral harassment, it is not merely a tirade on discrimination against women but an exploration of systemic violence, oppression, and exclusion. In other words, Ganieva seeks to depict a more fundamental structure of violence and exclusion, and the ways to escape from it. This structure is illustrated through the novel's character, who is alienated from his community and caught up in a cycle of violence against himself and the people around him – the clearest depiction of the structure of exclusion in Ganieva's works. This paper employs the mythological theory of René Girard to discuss the structure of exclusion.

**Keywords:** contemporary Russian literature, Russian literature, violence, Dagestan, Alisa Ganieva